Scene Vol.12

Ⅵ　多様化するニーズとAiの活用

3. エンバーミングにおけるAiの位置づけと役割に関する将来的な展望

橋爪謙一郎　（株）ジーエスアイ代表取締役

エンバーミング（遺体衛生保全）

エンバーミングとは，遺体が腐敗する原因となる血液をはじめとするタンパク質を，防腐効果のあるホルムアルデヒドなどの薬液を動脈から注入し，血液や体液を排出し灌流固定することによって，葬儀ならびに火葬までの間，身体が死体現象などの変化をすることなく，安らかな状態を維持することができる遺体の衛生保全処置である。

日本におけるエンバーミングの広がり

日本では，1988年に，埼玉県内に日本初のエンバーミング施設が開設された。当初は1年間に191件の処置が行われた程度であったが，2016年には3万7597件の処置が行われるようになり，現在では全死亡者数の約3％がエンバーミングをされるまでに増加している。エンバーミング施設は21都道府県に55施設が開設されており，多死社会に向かってさらにその処置件数が増加すると考えられ，その要因として，以下のようなものが想定されている。

エンバーミング事業が今後さらに期待される要因

1. 葬儀を行うまで，遺体を安置する期間が長くなっている

人口の分布からしても，今後，死亡者数は毎年増えていくことが予想でき，葬儀や火葬を行うまでに遺体を安置する期間は長くなることが想定される。そのため，きちんと遺体の防腐，殺菌処置を施しておくことで，安心してお別れの時間を過ごすことができる。

2. 遺体の処置や防腐に関する葬祭業者の知識不足への不安

遺体の処置については専門的な教育も体系だった資料もないため，葬祭業者は遺体の変化を予測して処置するのではなく，何か遺体に変化が起きた時に個々のこれまでの経験値で解決することが主な方法になっている。エンバーマーは，遺体の変化を予測して，変化が起きないように処置を施すため，突然体液が漏れたり，色が変化したりするようなことが起きにくく，安心して安置できる。さらに，病気そのものや病気の治療のために投与されている薬によっては，腐敗をはじめとする死体現象にも影響があり，これまで行われていたようなドライアイスなどで温度を下げて防腐を行うことだけでは不十分であり，遺体の状態を科学的根拠に基づいて処置するエンバーミングなどの防腐処置を行う必要性が増している。

3. 訪日外国人数の増加

訪日外国人数の増加（2016年：約2403万9000人）に伴い，死亡時に遺体を母国に移送するケースが増加している。飛行機を使って移送する場合には，ほとんどの航空会社にエンバーミング処置を施すよう求められるため，エンバーミングの需要も増している。

エンバーミングにおけるAiの位置づけ

エンバーミング処置の質を高め，良い状態の遺体に維持するためには，正確なケースアナリシス（Case Analysis）が不可欠である。ケースアナリシスとは，エンバーミング処置の前にエンバーマーが行う遺体の分析である。これは，適切な処置方法を選択し，防腐・殺菌・修復を行う上で重要な項目の一つであり，的確な遺体の状態分析がエンバーミングの良し悪しを左右すると言っても過言ではない。

分析の必要性は，エンバーミングだけに限ったことではない。遺体の状態をきちんと把握することで，起こりうる事態に備え対処することができる。分析することによって，遺族に対して根拠のある説明をすることができるようになるため，遺族の不安を取り除くことにもつながる。エンバーマーは，ケースアナリシスに当たり，遺体の触診，遺体の外形的な観

〈0913-8919/18/￥300/ 論文 /JCOPY〉